様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００１３２

研究課題名（和文）ポスト・ノスタルジー美学の成立と構造

研究課題名（英文）Formation and Structure of the Post-nostalgic Aesthetics

研究代表者
大橋　完太郎（OHASHI, KANTARO）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：４０４５９２８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：近代ヨーロッパを起点にノスタルジー概念や現象の歴史的経緯を追いかけ、1960年代までの概念的布置を理解することに成功した。また、創設された雰囲気学の設立にも関わったこともあり、日本独自のノスタルジー概念の解明にとって重要となる「空気」概念の歴史的展開について理解することもできた。また、期間中にパリ大学ナンテール校での在外研究に従事し、西洋諸分野における最新の研究成果を検討することができた。
上述の成果は国際学会での発表２件、国際的な学術雑誌への査読付き論文１件（入稿・修正済み）を代表的なものとし、ほかにも準学術雑誌に掲載された学術論文２件として、専門家・一般読者向けに公刊された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は21世紀以降グローバルなレベルで見出されるノスタルジー的傾向の解明を目指したものである。現在多くの文化産業におけるコンテンツ、あるいは文化政治のさまざまなアイデアは、ノスタルジーの構造に則ったものであることも多く、本研究の成果を参照することで、その効果やリスク、将来性について理解を深めることができる。本研究の成果は文化産業や芸術の制作的側面に対する生産的な触発として機能するものであり、真の意味での新しい文化芸術の潮流を生み出すために何がしかの役割を果たすものであることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This project aims at analyzing the history and the structure of the European notion of "nostalgie/nostalgia" so that it bring us the key to solve the recent cultural problem which is understood in the conceptual framework of "post-nostalgia". This notion also explains the recent nostalgic trends in the several cultural aspects. Through the whole survey of the European tradition around this notion, especially after the modern era, we discovered the difference between the nostalgia in the early modern period and that of the post-modern time.
We published three articles, including one published article in the international journal, and had two opportunities to make presentation in the international conferences.

研究分野：芸術学、美学、ヨーロッパ思想史、フランス思想

キーワード：ノスタルジー　想像力　記憶　現代思想　比較文化　雰囲気

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の学術的背景には、西洋の美学・芸術学および文化理論・文化研究の領域で散発的に行われてきたノスタルジー美学についての考察がある。１８世紀に提起された「ノスタルジー」という概念は、当時の傭兵に見られる望郷の病として認知されるが、それ以降は精神的な帰郷の欲求として解釈されるようになる。この概念は、日本語で「郷愁」とも訳されるように、故郷を懐かしむ思いとして定式化されてきた。近代においてこの概念の布置を刷新した重要な指摘は、アドルノおよびホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』（原著 1944 年）においてなされる。ナチズム出現以降の知的状況を大きな批判対象として捉えたこの著作において、帰郷の運動は人間の近代的合理性を決定づける精神的傾向として焦点化される。つまり『啓蒙の弁証法』内のオデュッセイア論が明らかにしたように、英雄が故郷へ還る運動それ自体が、西洋近代における他者の征服・馴致の運動の根底にあるものとして認識されるに至ったのである。近代の根底にあるノスタルジックなこの衝動については、たとえばボードレールの「近代性」議論をベースにした近代美学においても、十分にその重要性が認識されてこなかったように思われる。

もちろんこうした潮流に加えて、いくつかの重要な学術的貢献が批判的になされてきたのも事実である。たとえばフランスの哲学者・美学者であるジャンケレヴィッチは、著作『還らぬ時と郷愁』（*L'Irréversible et la nostalgie*, 1974）において、郷愁をもはや復元し得ない過去への思い、すなわち人間の有限性から必然的に生じる不可能なものへの欲求とみなし、時間における「あと戻りできなさ」に基づいた美的経験として提示している。ジャンケレヴィッチはノスタルジックな運動について、それが過去の黄金時代を未来への希求として投影する試みだとみなし、そこには過去と未来の逆説的関係が存在すると説明した。ジャンケレヴィッチにとって郷愁とはかつて約束された元へと還る未来への帰還を含むものであり、言うなれば過去の転倒としての未来像を提示するものでもあった。

ノスタルジーに対する近年の異なるアプローチは、フランスの文芸批評家バーバラ・カッサンにも見出される。カッサンは、近年の著作『ノスタルジー：つまりいつ人は我が家にいるのか？』（*La Nostalgie. Quand donc est-on chez soi?*, 2015）において、ヨーロッパは帰郷の病から逃れられないと主張している。カッサンは、戦後父なる大地に対するノスタルジーが失われた後でさえ、母なる言語に対するノスタルジーは残ると考えている。父なる大地である国民国家を規定する官僚的で紋切り型の政治的言語に対して、創造的で生産的な母なる言語こそが帰郷すべき対象となる可能性を肯定的に捉えている点にカッサンの独自性がある。

こうした状況に対して本研究は、「還る」衝動の構造それ自体についてもう一度改めて考える契機を与える。というのも、上に挙げたようなノスタルジー擁護の潮流にあたかも呼応するかのように、現代社会においては安易な「還帰」への誘惑が満ち溢れているように思えるからである（これについては「研究の着想に至った経緯」で詳述する）。とりわけ、ヨーロッパと異なって近代化における断絶が深い日本においては、ノスタルジーは歴史的な地平から相当程度切り離され、消費社会を促進する一傾向として奇形化しているようにさえ思える。本研究が「ポストモダンノスタルジー」と呼ぶ美学的視座は、こうした状況を批判的に捉えるための概念装置であり、その本質はポストトゥルース的状況と関係が深い「記憶

なき過去」の事後的形成過程に注目することで明らかになると考えられる。なお、本研究の挑戦的な側面について付言しておくならば、本研究は、単純化された過去に必ずしも束縛されない仕方で未来を思考するための感性論的図式を準備するものでもある。

２．研究の目的

本研究は「ポストモダンノスタルジー」の構造と様態を確定し、それによって現代の高度資本主義社会において形成されつつある感性的図式の一典型を示すことにある。

３．研究の方法

複雑な経緯を経て構成された現代的感性論としてのノスタルジーを考察するに際して、以下の 3 点からのアプローチを複合的に採用することが有効であると考えた。

A. 近代から現代に至る「ノスタルジー」概念の発生とそれに基づく表象の変遷
B. 記憶と表象・イメージの構造に関する強い参照枠としてのフランス哲学
C. 高度資本主義社会における大衆文化と記憶のメカニズムを説明する北米の文化理論

三つのアプローチは並行的に進められる。視点 A に基づくノスタルジー概念やその表象の歴史的変遷を追いつつ、「ポストモダンノスタルジー」の発生年代を 1990 年代後半から 2000 年にかけての時期と特定する。そこにおいては、西洋近代のノスタルジー理論が参照するものとは異なるマスカルチャー的な文化産物が特定のノスタルジックな様相（テーマとしてのレトロスペクティヴやタイムループなど）を帯び始めているという仮説のもとで、日本および欧米の芸術・文化の関連動向が中心的に検討される。視点 B はノスタルジー的なものの美学的位置付けについて、記憶と物質をめぐる根本的な議論に遡って検討する。ここでは物質と記憶、想像力についての哲学・美学的思考の蓄積として、フランス哲学の理論を参照枠とする。ノスタルジーが提起される１８世紀に展開した唯物論的美学やロマン主義美学に始まり、プルーストの芸術的想起の営為と関連づけられたベルクソンの記憶論を経て、それが今日の新唯物論・思弁的実在論へと変奏されるなかで、記憶と物質の関係にいかなる変化が見出されるのかについて検討する。視点 C は、こうした記憶の形象化をめぐる変遷が、いかにして文化のなかで生産物となって共有されうるかを検討する。日本ではまだ本格的に検討されていないフレデリック・ジェイムソンの『ポストモダニズム』におけるノスタルジー映画論、およびスーザン・スチュアートの *On Longing* における記憶と郷愁、ミニチュア化と記念品をめぐる議論を参照しながら、現代社会において時間的・空間的に離れたものの物象化・製品化が引き起こす効果について検討する。フランスにおける記憶・芸術の哲学の再解釈と日本を中心に見られる文化動向の検討に加えて、1980 年代以降を対象にした北米におけるポピュラー文化論の視点を導入することが、本研究の方法的独自性を形作っている。これにより、ポストモダンノスタルジーがもつ原理的な重要性のみならず文明論的な重要性をも明らかにすることが本研究の射程として措定される。

４．研究成果

2019 年度　研究論文１篇　学会誌書評２篇
2020 年度　研究論文３篇　学会誌書評３篇
2021 年度　翻訳書２冊
2022 年度　国際学会研究発表２回　辞書項目執筆４項目
2023 年度　国際ジャーナル査読誌１篇　研究論文１篇

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 大橋完太郎、千葉雅也、宮崎裕助	４．巻 49 (7)
２．論文標題 フラット化する時代に思考する ： ポストモダン思想再考	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 8,21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大橋完太郎	４．巻 52(15)
２．論文標題 偽書の思想史」ルネサンスからポストモダンまで	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 139-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大橋完太郎	４．巻 12
２．論文標題 批評の消息：消極的合法性からの脱出	５．発行年 2020年
３．雑誌名 エクリヲ	６．最初と最後の頁 234-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大橋完太郎	４．巻 48-1
２．論文標題 「ポストトゥルース試論 2020 ver.1.0　真実以後を思考する（ために）哲学」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 150-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Kantaro OHASHI
2．発表標題 Peut-on moraliser le sexe ? -- La comparaison entre humains et animaux dans l'histoire naturelle en France au XVIIIe siecle.
3．学会等名 Journee d'etudes　"Animalite Queer"（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Kantaro OHASHI
2．発表標題 La nature moderne dans les romans et essais de Sakaguchi Ango
3．学会等名 Colloque International "SHIZEN（自然）: LE CONCEPT JAPONAIS DE NATURE"（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 大橋完太郎
2．発表標題 個の救済とポップなものの哲学
3．学会等名 表象文化論学会
4．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

1．著者名 マーク・フィッシャー（翻訳：大橋完太郎）	4．発行年 2022年
2．出版社 左右社	5．総ページ数 384
3．書名 ポスト資本主義の欲望	

１．著者名 ニック・スルネック（翻訳：大橋完太郎）	４．発行年 2022年
２．出版社 人文書院	５．総ページ数 180
３．書名 プラットフォーム資本主義	

１．著者名 大橋完太郎、トーマス・ブルック	４．発行年 2021年
２．出版社 神戸大学出版会	５．総ページ数 230
３．書名 他者をめぐる人文学　グローバル世界における翻訳・媒介・伝達	

１．著者名 大橋完太郎、吉水佑奈	４．発行年 2021年
２．出版社 神戸大学大学院人文学研究科	５．総ページ数 96
３．書名 人間技術と文化に関する国際共同研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計5件

国際研究集会 PASSAGES PHILOSOPHIQUES VI: Online Symposium on Contemporary Philosophy in France and Japan	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 「共同学術セミナー第４回：エコロジー哲学、芸術、政治 Passages philosophique IV Ecosophy, Arts, Politics」	開催年 2019年～2019年

国際研究集会 ワークショップ 「メディアの諸相：ローカルとグローバルの潮流 Aspects of Media: Local and Global Currents」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 共同研究セミナー「芸術・日常性・カタストロフ（Arts, Quotidiennete, Catastrophe）」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 「共同学術セミナー第５回：日本とフランスにおける現代哲学」	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	パリ大学ナンテール			
フランス	Paris University Nanterre			
英国	ロンドン大学			